西洋の敗北と構造的な予測

選びによって人を選ぶ、というのがプロテスタントのカルヴァン派の教え。
生まれながらわかっているという予定説。我々には予知できない。それで、どうして知るかというと、選ばれたら、この世では成功するはず。これは努力の結果ではない。神に直接返したいができないので、隣人に返す。トランプ大統領はカルヴァン派で、自分は神から選ばれたと思っている。

この教えは分断ではなく、格差の是正に向かっていく。その方向で回っていく。能力は他者に使っていく。それが資本主義に向かうと、どんどん投資することになる。

そのカルヴァン派の教えがいま世俗化している地域がある。

エマニュエル・トッド氏によると、

世俗化は日本や中南米では、歯止めがかかっているが、西ヨーロッパでは、世俗化で宗教ゼロ状態になり、なぜか歯止めがかからなくなっている。世俗化の歩留まりが利かなくなっている。その理由の１つがＬＧＢＴＱで宗教ゼロ状態になった、という。

トランプ大統領はジェンダーについて、「自分を、男性だが女性として意識している、女性だが男性として意識している」ということは否定していない。

生物学的には男と女しかいない。これは事実。性はあくまで生物学を基準にする（染色体は変えられない）。意識ではない。自己意識によって存在は変えられない。手術によって変えられない。これは虚構で、染色体によって男女を分けるという考え方をする。これはプーチン大統領と同じ価値観。プーチン大統領は、それは西側でやってほしい、ロシアにはロシアの伝統があるという。習近平主席は、トランプ大統領とよく似たタイプの指導者でおそらく近い価値観のように思える。

この波は日本にもやってくる。生産の哲学を戻し、Ｍ＆Ａなどで、そこに富が行くのを食い止める、という世界的な保守革命。

「性の平等」「同性愛」についてはいい。しかし、「トランスジェンダー」は別次元の問題だとする。虚構の上で成り立っている。単に自分の好みにしたがって「ジェンダー」を変えられるという主張、ホルモン剤を摂取したり、手術を受けたりすることで「性別」を変えられるという主張は、「性の平等」や「同性愛者の解放」とは、まったく別問題、とトッド氏は考える。

令和７年２月６日の報道によると、トランプ大統領は、トランスジェンダーが女性スポーツ競技に参加することを大統領令で禁止した。

日本でも、西洋の規範に合わせようとしてＬＧＢＴに関する法律が制定された。
最高裁判所は、経産省のトランスジェンダー職員の女子トイレ使用禁止は違法だとする判決を下している。渋谷区には女性公衆トイレがなくなったという。

日本が政治的にＬＧＢＴ思想に転換したことで、日本の国民がアメリカに近づいたのだ

ろうか。

バイデン元大統領は宗教ゼロ状態の思考、観念論的で、意識で性を決める。
トランプ大統領は、唯物論的。客観的な実在によって分ける、意識を決める。こえはマルクス的。

ＬＧＢまではアメリカでも区別はある。ＴＱ＋以降とは、差がある。トランプ大統領は異常なのか、というとそうでもない。

トランスジェンダーはわからない。例えば、見た目は男性だが、内心は女性意識、そしてレズビアン、だから女性です。それは心の問題だからわからない。本人の自己申告なので、外から見てもわからない。もし、おかしな人が更衣室に入ってきたらどうするのか、とトランプ大統領は言う。

哲学者の柄谷行人氏は、世界システムは民族、国家、資本からなるという。世界が今後どうなるかという構造的な予測はできる。資本が強くなりすぎると国家が弱くなる。民族が強くなりすぎるとナチズムのようなものが生まれる。この３つのバランスの取り合いが起きている。

トランプ大統領は、今、国家機能を強くして、資本の機能を弱めようとしてる。それに気づいたイーロンマスク氏が自分の生き残りを図っている。

柄谷行人氏は、マルクスが下部構造とした生産様式を、「交換様式」というフレームで捉え直した。交換様式とは人と人、社会と社会がどのような形で様々な価値を交換するのかということである。柄谷氏によれば、人間社会の交換の形態は四つに規定される。

交換様式Ａ　互酬（贈与と返礼）
交換様式Ｂ　略奪と再配分（服従と再配分）
交換様式Ｃ　商品交換（貨幣と商品）
交換様式Ｄ　Ａ、Ｂ、Ｃを超える新たな交換様式＝Ｘ
　　平等性だけでなく、個人の独立性が重要

資本＝民族＝国家とは、交換様式ＡＢＣの結合体である。したがって、それを揚棄するということは、実は不可能。そのためには、交換様式Ｄが不可欠になる。Ｘは向こうからやってくるという。

「西洋の敗北」エマニュエル・トッド著から引用
トランプ大統領の発言から引用
作家・佐藤優氏発言から引用
「力と交換様式」柄谷行人著から引用